

悔過会所用の〔大懺悔〕と〔三十二相〕

廣
瀬
美
都

3 悔過会所用の〔大懺悔〕と〔三十二相〕

悔過会は「旧年の諸罪障を懺悔して当年の安穩豊楽を祈願する法会」（佐藤道子『東大寺修二会の構成と所作上』、1973）である。奈良朝以来、国家的行事として現世利益の面が強調されるが、本来は日常の罪を僧侶が告白懺悔をする「布薩」「自恣」など、自らの為の行と起源を同じくする行事といえる。もっとも悔過では個人の罪の懺悔よりは一切の衆生になりかわる懺悔という意識が強く、本尊に対して禮拜・讚嘆を重ねて祈願の前提とする様相が認められる。法要としての成り立ちも、行を勤める功德が特定または不特定の他者に耳目を介して浸透することを期して、音声・音具を駆使し、所作を伴なう儀礼様式として固定をみたものと思われる。修正会・修二会として年中行事化された悔過の法会には、「自行から利他へ」（佐藤、講座「悔過会とその周辺」1973）の流れが読みとれる。なお悔過会の史的变化遷については、『南都仏教』第五十二号の二月堂特集に掲載された永村真、山岸常人、安達直哉の先学諸氏の論文から多くを学び、全国に現存する悔過会の実態調査の結果については、当研究所の昭和五十九年夏季学術講座で佐藤道子氏が講演された『悔過会とその周辺』に負うところが多大である。

本論で対象とする「大懺悔」は悔過懺悔という法会の目的を最も直接的に示す楽曲といえる。また「三十二相」は仏の相好にあらわれた三十二種の身体的特徴を讚嘆する楽曲である。両者とも悔過会の趣旨を声明に結晶させた内容といえる。なお「大懺悔」は天台宗では「堂行三昧（例時作法）」に、「三十二相」は華嚴宗（東大寺）で月例の仏生会に用いられるので、悔過会専用曲とはいえない。禮拜や懺法の自行的法要を含めて悔過会の周辺を考えることも有益であろう。

つぎに楽曲としての特徴であるが、悔過会の声明の中では、旋律の面でも拍子の面でも変化に富んでいるといえる。悔過の法要の本体の主要部をなす「称名悔過」や「宝号」は仏・菩薩の名号を次々と唱えたり、本尊への絶対的帰依の表明として数を重ねて名号を唱える部分であるが、数種の基本旋律型を繰り返していく点に特徴がある。悔過会らしい

声明の特質はむしろ同旋律型の繰り返しにあるが、そのために楽理的分析の際には、頭教立にも密教立にも属さない別立の行事として、共通の土俵で論じられることが少なかつたように思われる。「大懺悔」と「三十二相」にも同旋律型の繰り返しは多いのであるが、それぞれ、一曲としてのまとまりがあり、伴奏をつけたり、途中で拍子を変化させる指示などがあり、現行様式の比較考察の対象としても興味をひかれる楽曲である。

さらに、伝授の形態について、譜本から考察すると、「三十二相」と「大懺悔」は特別な曲として扱われたようである。悔過会の専用曲は、悔過の本尊や演式に対応して唱句が変化するという内容なので、寺院や堂塔毎、数座や数日に及ぶ場合はその変化様式毎にそれぞれの法要構成曲として記されている。そして基本旋律型を会得すれば唱えることが可能なので、音楽的情報は旋律の細部に及んで記されることは少なく、大旋律型名や特記事項（所作との連動、特に大きな声や小さな声）などのみを唱句に書き添える例がほとんどである。ところが、「大懺悔」と「三十二相」については、音高表示や拍節表示を具体的に記した譜本が存在している。しかも、法要構成曲の定位置に示す例のほかに、別綴の譜本として単独に、または「大懺悔」と「三十二相」を合わせて記す例が少なくない。その他に伝授物をまとめたと思われる声明集の中に両曲の譜が含まれていること、「三十二相」については伴奏に雅楽を加える演式が存在して、雅楽の側に記録や口決の類が残されていることなどが特筆されると思う。

管見に入った譜本類は、南都系、天台系、真言系の伝承をたぐる目的の一助となるように比較考察し、年代的上限や現行伝承との対応の可否を検討したいと思う。

一、現行悔過会における演奏例

〔1〕大懺悔

〔詞章〕^(注1) ①②は唱句の位置の目安に付した。

① 至心懺悔 ② 如是等 ③ 一切世界 諸仏世尊 常住在世 是諸世尊 当慈念我 憶念我 証知我 若我此生 若我前生
 從無始生死以來 所作衆罪 不自覺知 若自作 若教他作 見作隨喜 若塔 若僧 若十方僧物 若自取 若教人取
 見取隨喜 惑作五逆 四重 無間重罪 若自作 若教他作 見作隨喜 十不善道 自作教他 見作隨喜 所作罪障 或
 有覆藏 或無覆藏 ④ 心墮地獄 餓鬼畜生及諸惡趣 ⑤ 刃地下賤 及旃屛車 如是等 取作罪障 今於十方 三世諸仏
東大寺 前東大寺 懺悔 〓 懺悔 〓 發露皆悉懺悔 至心發願 願我等 從今日 乃至無上菩提於一切 〓 〓 〓 常得值遇 〓 〓 〓 三世
 諸仏 〓 普賢文殊 觀音勢至 地藏菩薩 令我恒得親近 恭敬供養 (〓 供養恭敬) 發菩提心 永不退轉 〓 〓 〓 值遇 〓
(常生) 淨処 淨仏国土 斷除三障 永離衆難 成無上道

「大懺悔」は、華嚴宗・天台宗・真言宗では「オオイサンゲ」、法相宗系では「ダイサンゲ」と読まれる。詞章全文を示したが、実際には、宗派により行事により、一部を略して唱える、早口で唱えるなどの演出があり、句頭と同音の位置も微妙に異なる。また、天台宗では前半を無拍節、後半(⑨以降)を二字一拍で唱えるという拍節法の指示がある。

「大懺悔」の内容は、前生から現世を経て後生に至るまでの間に無意識に犯すかもしれない罪をも含めたすべての罪過を諸仏諸尊の前に懺悔するというものである。法要の組み立ての中での位置関係は〓図1〓のとおりで、悔過の法要で各宗派に普遍的に唱えられる「称名悔過」「宝号」などと、それに付される懺悔の意の所作「五体」(華嚴宗)・「如法念誦」(法相宗)、願意の表明「五仏五名」(華嚴宗)・「祈請」(法相宗)などで構成される主要部全体に対して、念押しの意味で「大懺悔」が配され、「後行道」などの終結部が続くという図式になる。御懺法講(天台宗三千院)の「声明例時」においても、法要主要部の「念仏」「合殺」の終了後、「大懺悔」が配されて、終結部に至る。

唱句の構成と唱法には、宗派や行事によって変化があるが、筆者が実査により確認したのは次の諸例である。

(1) 東大寺(華嚴宗)

1、二月堂修二会 十一面観音悔過

a、「初夜」悔過作法

△唱句▽①至心懺悔く⑬皆懺悔までを「大懺悔」、⑭至心発願く⑮無上道までを「小懺悔」と称する。

△唱法▽句頭は①至心懺悔如是まで。同音(独唱から斉唱となる箇所)は③等一切世界から。⑬皆懺悔までは誦唱(早口でさらさらと旋律をあまり付さずに唱える)△譜1▽。⑭至心発願願我等までは再び句頭が唱える△譜2▽。

⑯從今日以下⑰無上道までは誦唱。

b、「後夜」悔過作法

△唱句▽「初夜」に同じ。

△唱法▽①く②は簡略な旋律で、③く⑬はほとんど聞きとれない早口で唱える。⑭く⑮は「初夜」に同じ。

2、大仏殿修正会 如意輪観音悔過「初夜」

△唱句▽①至心懺悔く⑱皆懺悔まで。⑭く⑱は唱えないが、ひきつづいて異なる唱句の「発願」を唱える。

△唱法▽1aの⑬までと同じ。

3、修二会別火坊にての長音「大懺悔」

悔過会の本行の中では今日唱えられないが、前行の場の別火坊において、本行に入る直前に唱えられる特殊演式がある。本行で唱える様式は同音以下を早口で唱える「短音」だが、俗世を離れて別火の行を仕上げるにあたっては、全文を節づけて唱える「長音」の「大懺悔」を唱える。

悔過の法要に関わる声明で、「供養文」(称名悔過)「宝号」などを、丁寧な節づけて唱える「称揚しょうりやう」という様式がある。はじめて参籠する「新入」の練行衆が「初夜」または「後夜」に法会中一回だけ時導師を勤める際に唱えられる。

通常の節づけは「短音」、「称揚」の節づけは「長音」といえる。

別火坊での「大懺悔」は、自行的法要の場で非公開で唱えられるが、様式としては「称揚」に対応する「正格」の唱法に位置づけられる。

△唱句▽①～⑱まで

△唱法▽同音の③以下も節を付す ㄱ譜3 ㄱ。

(2) 法隆寺（聖徳宗Ⅱ法相宗系）

1、金堂修正会 吉祥悔過〔初夜〕〔後夜〕

△唱句▽①至心懺悔⑩及諸悪趣まで

△唱法▽同音は③等一切世界から。①～⑩までの全文をリズムミカルな節付けで唱誦する。ㄱ譜4 ㄱ 句末の旋律に特徴がある。⑧応隨地獄からは切迫してリズムをくずしていき、⑩及諸悪趣はテンポをゆるめ、連続的に音をずりあげて投げおろすように唱える。

2、夢殿修正会 十一面観音悔過〔初夜〕〔後夜〕

△唱句▽△唱法▽とも1、に同じ

3、西円堂修正会 薬師悔過〔初夜〕〔後夜〕

△唱句▽△唱法▽とも1、に同じ

(3) 薬師寺（法相宗）

金堂修正会 薬師悔過〔初夜〕〔後夜〕〔日中〕

△唱句▽①至心懺悔く⑩及諸惡趣まで

△唱法▽同音は③等一切世界から。①く⑩までの全文を唱誦する。△譜5▽⑦或有覆蔵から切迫したりズムになり、⑧応墮地獄以下は(2)と類似の技法を用いる。

(4) 若松寺(山形県天童市、天台宗)

修正会 千手千眼経過

△唱句▽導師が「大懺悔」と唱えた後、①至心懺悔く⑩成無上道までを①く⑩と⑪く⑫の二段に分けて唱える。導師の「仏名」が付される。

〔仏名詞章〕

南無婦命頂礼如来妙相 令法久住益人天ノ為ニ 釈迦牟尼仏 一切神分 般若心経

△唱法▽導師が「大懺悔」と唱えた後、太鼓を流し打ち、同音は②如是から。太鼓を伴ない一字一拍で唱える。

⑬今於十方から早口で唱えて(太鼓は打たない)⑭皆悉懺悔まで、あらためて⑮至心発願と頭をとり、⑯願我等から太鼓を伴ない一字一拍の唱法で⑰常生浄処まで唱える。浄仏国土以下は再び早口で唱える。△譜6▽

(5) 慈恩寺(山形県寒河江、天台宗系)

修正会 弥勒悔過

△唱句▽①至心懺悔く⑩成仏成道までを、①く⑩と⑪く⑫の二段に分けて唱える。⑬の半ば常得値遇のあと、十方三世諸仏の六字をさしはさんで普賢文殊以下を唱える。

△唱法▽同音は②如是と⑬願我等から

(6) 中尊寺(岩手県平泉、天台宗)

修正会

△唱句▽①至心懺悔〱⑩の終わりの所作罪障まで。

△唱法▽同音は④一切世界から。

なお、毛越寺(岩手県平泉)は、悔過の作法を略し祈願の作法から法要を開始するので「大懺悔」は唱えない。また陸奥国分寺では、唱句の全文①〱⑱を法則に記すが微音で唱えるのみである。

(参考) 三千院御懺法講 常行三昧(声明例時)

△唱句▽①至心懺悔〱⑱無上道までを一連の詞章としている。ただし昭和五十四年の御懺法講再興時に短縮演出となり④の終わりの随喜から⑤の終わりの随喜へ飛んで⑤を略す習慣になっている。

△唱法▽同音は④一切世界から。⑧の終わりまでは無拍節の序曲であるが、⑨の畜生の生の字から急となり、二字一拍の定曲となる。一字おきに拍子点が打たれている。なお、⑱の懺悔と⑭の至心は、無拍子で唱える。上薦が独音で唱えるという伝承(注2)もあり、ここで段をとったと考えることができる。

以上「大懺悔」の現行伝承について比較考察を試みた。事例の不足や片寄りは今後補なうこととして、『集諸経礼懺儀』(注3)に基いて成立した儀礼が古代系の諸宗派に広まり、多様な演式を生みながら今日に至る経緯をたどる基礎的資料としたい。

〔2〕 〔三十二相〕

〔詞章〕(注4)

①〱⑳は三十二の相、①〱⑧は回向句。

△三十二相▽

① 烏瑟賦沙無見相

③ 面輪端正滿月相

⑤ 眼睫紺青不乱相

⑦ 四十齒齊逾雪相

⑨ 舌相広長覆面相

⑪ 梵音和雅等聞相

⑬ 容儀洪滿端直相

⑮ 肩項円満殊妙相

⑰ 胸臆身半師子相

⑲ 身皮細滑離塵相

⑳ 陰相蔵密象王相

㉑ 双腭漸次織円相

② 髮毛右軫紺青相

④ 眉間豪右旋相

⑥ 眼精紺色分明相

⑧ 四牙鮮白鋒利相

⑩ 常得上味適悅相

⑫ 常光面各一尋相

⑭ 身相修広端嚴相

⑯ 七処充滿愛樂相

⑰ 膊腋悉皆充實相

⑲ 身色光麗金體相

㉑ 毛孔一生右旋相

㉒ 兩臂修直摩膝相

㉔ 足踉広長称趺相

〈臆身半師子相〉

葉へ頂へ

葉ハ白豪

葉ハ上

27 足^{ソク} 踏^フ 修^{シュ} 高^{コウ} 称^{ショウ} 跟^{ゲン} 相^{ソウ}

（へ妙↓好）
（へ奪）

29 諸^{ショ} 指^シ 円^{エン} 満^{マン} 織^シ 長^{チヤウ} 相^{ソウ}

31 千^{セン} 福^フ 輪^{リン} 文^{モン} 円^{エン} 満^{マン} 相^{ソウ}

1 我^ガ 今^{キン} 略^{リョク} 讚^{サン} 仏^{ブツ} 功^ク 徳^{トク}

3 廻^エ 此^{コノ} 福^{フク} 聚^{ジュ} 旋^{セン} 群^{グン} 生^{ジョウ}

1' 我^ガ 今^{キン} 略^{リョク} 讚^{サン} 仏^{ブツ} 功^ク 徳^{トク}

3' 廻^エ 此^{コノ} 福^{フク} 聚^{ジュ} 施^シ 群^{グン} 生^{ジョウ}

5 初^{シュ} 一^{イツ} 智^チ 断^{ダン} 諸^{ショ} 智^チ 断^{ダン}

国〈初〉

7 分^{ブン} 及^{キヤク} 分^{ブン} 之^ノ 捨^{セツ} 功^ク 徳^{トク}

慈〈文及ノ分ノ〉
国〈仏及仏之〉

28 指^シ 間^{カン} 鞞^ン 網^{キヤウ} 金^{キン} 色^{シキ} 相^{ソウ}

30 手^{シュ} 足^{ソク} 柔^{ジュ} 軟^{ネン} 勝^{ショウ} 余^ヨ 相^{ソウ}

32 足^{ソク} 下^ゲ 平^{ヘイ} 満^{マン} 等^{トウ} 触^{ソク} 相^{ソウ}

2 於^オ 德^{トク} 海^{カイ} 中^{チュウ} 唯^{エイ} 一^{イツ} 滴^{テツ}

4 皆^{カイ} 願^{ガン} 速^{ソク} 証^{ショウ} 菩^ボ 提^{テイ} 菓^カ

2' 於^オ 德^{トク} 海^{カイ} 中^{チュウ} 唯^{エイ} 一^{イツ} 滴^{テツ}

4' 皆^{カイ} 願^{ガン} 速^{ソク} 証^{ショウ} 菩^ボ 提^{テイ} 菓^カ

6 智^チ 中^{チュウ} 不^フ 生^{ジョウ} 不^フ 思^シ 議^ギ

慈〈生ノ不中ノ〉
国〈中不捨〉

8 双^{シュウ} 照^{ショウ} 菩^ボ 提^{テイ} 証^{ショウ} 妙^{ミョウ} 果^カ

慈〈脱〉
国〈正見〉

〔三十二相〕は、祈願の作法である「大導師作法」に先立つ莊嚴曲として唱えられることが多い。悔過会毎に法要の構成は多様であるが、「悔過」「祈願」「呪禁」という目的に対応する儀礼が何らかの形で盛りこまれているといえる。東大寺修二会のように大規模な構成による法会にも、一日の一座の法要に縮小された法会にも同様の理念が読みとれる。「祈願」の法要部分に先立つ莊嚴・讚嘆の曲として唱えられる〔三十二相〕は、たとえば「初夜」と「後夜」の二座（先に「悔過」、後夜作法として大導師の「祈願」が行なわれる形）なら「後夜」の法要の導入部として唱えられることになる。もっとも法要構成の必須の要素とは意識されなかったようで、〔三礼文〕〔礼仏頌〕などの礼拝の趣旨を示

す部分の後に「三十二相」を唱えず、「表白」以下の折句に入ることが多い。なお、「三十二相」のあと讃嘆の句の「仏名」、本文の内容を和文に解きやわらげた「教化」を唱えることがある。

声明曲としては、細かい節付けによる例から素読みに近い例まで様式の幅が広い。全体に共通するのは、拍節が強調されていることである。旋律を付す場合は、パターンが循環することになるが、一句毎に同じ節付けで全文を唱える例、特別な句には高い方の核音で終止する節付け（「甲」「高」などと表記）をさしはさむ例、六句を一単位に回向句を加えた三十六句を四順で唱える例などが認められる。

楽器や音具を伴奏に用いる例が多いが、この曲の特徴といえる。代表的なのが雅楽との合奏例で、教訓抄巻六に「卅二相ノ様」とあり、興福寺東西の修二月、八幡宮、妙音院、菩提山などの事例を掲げ、楽曲の例、拍子などの多様な説が示されている。楽入りの三十二相は久しく絶えていたが、昭和二十六年に「三十二相本曲」と「散吟打球楽」の復元合奏が、片岡義道（天台声明）、東儀和太郎（小野雅楽会）の両氏の指導により試みられている。^{（注5）}

その他の楽器として、小さな「鉞^ぼ」（銅拍子）を用いる例（薬師寺）、太鼓を用いる例（若松寺）、杖で板をたたく例（慈恩寺）などがある。薬師寺では「鉞」を「羯鼓」と称しており、雅楽伴奏の名残りとみられることもできる。

(1) 薬師寺

金堂修二会「初夜」大導師作法

△唱句▽大導師が「三十二相」と唱えた後、①②に続けて③④を唱える。続けて導師が「仏名」と「教化」を独唱する。

〔仏名詞章〕

南無婦命頂礼 如来妙相 生生世世 如是讚嘆

〔教化詞章〕^(注6)

四八ノ相円明ニシテ 三五ノ月ノ影ヨリモ勝タマヘリ 烏瑟タカクソビエテ 梵天モンノ頂ヲミルコトナク 白毫
ヒロク三千大チヲ照シテ 讚シ奉ル事ナラビナクソアリケレ 之ニ依テ信心ノ長吏諸徳 千秋ノ福寿ヲ持タ令メ給フ
ベキ者ナリケリ

△唱法▽句頭が①の句と②髪毛までを独唱し、右転から同音で唱える。同音以下は旋律を付さずに一本調子で比較的ゆったり唱える。「欽」二丁が、二字に一打、ところどころ一字に一打で奏され、拍節感を補強している。東北系の三十二相よりはずっとゆっくりで平板な印象を受ける。

(2) 若松寺(天台宗)

修正会「後夜」作法

△唱句▽導師が「三十二相」と題を唱える。本文は①②に続けて③④まで。後に「教化」が付される。なお、東北の天台系諸寺に共通するが、一字が二音節に相当しない場合に音引きの代わりに「ヤ」や「ノ」をはさんで音調を整える例がみられる。③は廻此ヤ福聚ノ旋群生と唱える。

〔教化詞章〕^(注7)

仏ノ御顔ニハ春秋ヲコソソナエ給フ 舌ニハ葉ヲフクミ 唇ニハ花ヲ開給フ者コソ有ケレ 聖ノ御躰天地ヲ重ネ給フ
眉ニハ月カカゲ眼ニハ池ヲ湛ヘ給フモノニゾ有ケレ カカル仏相ヲ誉メアゲ 大施主年栄の華ハ開キ給フ カカル随好
ヲ栄シ給フ 万堂ノ幸ヒ源ト深シテ 百味豊ニタモタシメ給フ者ニコソアリケレ

△唱法▽導師の「三十二相」の声で、太鼓が流し打ちをする。句頭は①と②を無拍で細かい節をつけながら先唱する。無間相のあたりから拍にあてていき③からは同音で唱え太鼓が拍打される。④以降は通常のパターンが四句、上

方の核音に終止するパターンが一句、通常に戻すパターンが一句で計六句一単位で循環している。つまり⑦が上げる句、⑧が戻す句で、⑨⑩⑪⑫と同じ唱え方をして⑬が上げる句、⑭が戻す句になる。同様に⑮・⑳・㉑が力のこもった唱えられ方になる。㉒まで唱えて一滞の滞の字で太鼓のフチをたたき半分終止した感をいだかせる。さらに⑳㉑と唱え、再び菩提果の果で太鼓のフチをたたく。△譜7▽

(3) 毛越寺 (天台宗)

修正会

△唱句▽①～⑳に続けて㉑～㉒までを唱える。「仏名」は前半を三十二相の頭、後半を導師が唱える。「教化」は導師が唱える。

〔仏名詞章〕

(頭)南無婦命頂礼 如来妙相 (導師)生々世々 值遇讚嘆

〔教化詞章〕^(注8)

三十二相ノ春ノ花 鮮ヤカナリケレバ 万世ノ春毎ニ開クベキモノナレ 八十種好ノ秋ノ月 朗ラカナリケレバ 千
秋ノ齡^{コソイ}ヲ照ラシマシマスベキモノナリケレ

△唱法▽句頭は①と②の句を唱え、③から同音。全句は同一の節付け△譜8▽で唱える。

(4) 中尊寺 (天台宗)

修正会

△唱句▽①～㉒に続けて㉑～㉒までを唱える。さらに①～④としたが廻向句を頭が再び独唱する。つづけて同じ

く頭が〔仏名〕の前半を、後半を導師が唱える。〔教化〕は導師が唱える。

〔仏名〕 唱句・唱法とも(3)と同様。

〔教化詞章〕^(註9)

三十二相ハ仏^{ホト} 雲ノ上ニテ オコナイアタマヘリ ケンシツ高クアラハレテ 星ハ眉間ニ見ヘケレバコソアリケレ

△唱法▽

句頭は①と②を多少ゆったり唱える。③から同音となり、きわめてリズムカルに唱える。たとえば⑤の後半の不乱相の不で五度上行、乱で五度下行、相で裏返すように息扱いを強く唱えた後、コミをとるように音は静止する。循環する旋律型で、⑥↓⑪、⑫↓⑬、⑭↓⑮、⑯↓⑰、⑱↓⑲、⑳↓㉑と㉒と波のようならねりをつけて唱えていき、㉓で終止する。①～④の唱句は再び頭によって独唱され、〔仏名〕〔教化〕と続く。△譜9▽

(5) 慈恩寺(山形県 寒河江 天台宗系)

修正会〔後夜〕導師作法

△唱句▽①と②のみを頭が唱誦し、③～⑫までは杖で長板をたたきながら、早口で物音に隠れてしまふ形で誦唱される。⑬の句を頭が唱誦、⑭～⑰は再び杖で打ちながら誦唱、⑱の句は頭が唱誦、⑲～㉒はまた杖を打って誦唱する。㉓～㉔の句については天台系古譜(後述)とは用語・用字が異なる。〔詞章〕の所に併記している。

△唱法▽杖の打音が乱声として意識され、悔過会らしい演出であるが、音頭の唱える部分以外は唱句を聞きとれない。

(6) 陸奥国分寺(仙台市、天台宗)

修正会「後夜」導師作法

△唱法√①～②までを唱誦の後、①～④、⑤～⑧の二段に分けて廻向句を唱える。⑤～⑧の用語・用字の異同は〔詞章〕の所に併記している。

△唱法√句頭は②まで、同音は③から、基本の旋律型と高音域で終止する旋律型を織りませる。「甲」と記される強調型は⑤・⑦・⑪・⑬・⑰・⑲・⑳・㉓・㉕・㉙・㉚である。周期性に関連づけるとすると、若松寺や中尊寺の伝承とかかわると思う。

以上のように、現在まで伝承されている例の演出や唱法を個別に検証してみると、共通性と独自性の両面がそれぞれ浮かびあがってくる。共通性には悔過が全国的に政策上施行された推進力をまざまざと感しさせられる。独自性からは、古代から寺毎に変容を余儀なくしつつ、絶やすまいと努力した険しさをはからずも見ろ思いがする。伝承の先後関係などは他の曲群の調査を待つて慎重に検討していきたいと思う。

二、「大懺悔」「三十二相」を含む古譜

〔1〕 譜本の書誌

悔過会の譜本で江戸時代をさかのぼる例は稀だといえる。悔過の法要の部分については参籠の際の心覚えの為に詞章を書写し、譜を書き添えるという形の譜本が多い。実用に供する消耗品、あるいは私的な控えとして意識され、後代に長く伝える為の譜本はあまり作成されなかったということであろう。

「大懺悔」と「三十二相」は、悔過会所用の曲であるが、楽曲としての独立した特性があるので、古譜の中に伝授物として譜が残されている例がある。

古譜で注目に値するのは、古代系の各宗派の声明の流れを受けついでた称名寺の剣阿の残した金沢文庫の声明集である。『金沢文庫資料全書 第八卷』^(注10)に影印翻刻されている声明集のうち、次の三点に「大懺悔」と「三十二相」が含まれている。解題によれば

(1) 「聖宣本声明集」 声明集部一 鎌倉時代 仁治三年(一二四二)および寛元三年(一二四五)の伝授記を付す曲が七曲ある。曲の配列順から推量すれば、「三十二相」は仁治三年八月以前、「大懺悔」は仁治三年十一月以降で寛元三年正月以前に興福寺僧順良房聖宣から弟子の深寛房印円に伝授されたらしい。収録曲数三十四曲中、「三十二相」が十三曲目、「大懺悔」は二十九曲目にあたる。この声明集は天台系顕宗のもので、大原本願良忍上人の門下に伝わる諸流諸派のいずれの説かは未特定。聖宣・印円とも雅楽の著書を記すほど楽舞に秀で、『教訓抄』を記した狛近真に非常に近い人物という。

(2) 「声明集文保二年(一一三一八) 仮名曆紙背」 声明集部二 天台系顕宗声明譜集。収録曲数二十七曲中、「三十二相」は十一曲目、つづけて「大懺悔」が収められている。その他の収録には布薩用と懺法用の梵唄、花供後讚、百石讚など自行にかかわる声明が目立つ。

(3) 「声明集抄覚意五音博士」 声明集部五 南山進流声明譜集。鎌倉時代。現状は断簡二葉、表裏両面書き。甲の表「三十二相」の第六句より第十七句まで。乙の表に「大懺悔」(昌頭三十九字欠)と「小懺悔」、乙の裏に「大懺悔」(昌頭五十六字欠)と「小懺悔」がある。その他は「錫杖」「仏名」「礼仏頌(曲名のみ)」「九条錫杖」。乙裏の末尾に「已上小原様也以行禅律師本交合畢」とある。収録曲は悔過会において、堂方が斉唱した可能性のある楽曲に限定されているように思われる。

以上の三種の譜本について記載内容を検討していくことになるが、(1)の「聖宣本声明集」と転写関係にあるか、または祖本を同じくする別本が法隆寺に所蔵されていることが最近判明した。裏書には漢方処方の秘説を記していて、鎌倉時代の資料であることは鑑定されている。^(注11) 残念ながら前後欠で奥書はない。(1)の収録曲の十一番目「舍利讚嘆(上段)」の「仏ノ道ニイリハテヌ」から、二十九番目の「大懺悔」の標題まで、内容は完全に一致している。ただし、行の割付や用字、譜の付け方といった細かい点で相違がある。今回の考察にこの別本を加えることとし、(1)は金沢文庫蔵で(1)Kと記し、法隆寺蔵の方は(1)Hと記すことにする。

〔2〕「大懺悔」

(1) K 「聖宣本」詞章全文。譜をすべてに付す。①至心懺悔如是 等一切世界諸までは笛の穴名、仏世尊からは箏の絃名で音高を表示している。無拍から有拍への移行とかかわる可能性がある。「音頭」の指示が⑩及諸悪趣、⑭至心発願にあり、「同音」の指示が④一切世界⑪辺地下賤にある。調と拍にかかわる表示はない。

(2) H 「法隆寺本」表題のみ。かろうじて「仏世尊常」と「尊当慈念我億我証」が読みとれる。譜が付されている痕跡もあるが(1)Kとの対照は不能。

(3) 「文保本」詞章全文。笛の穴名で全文に譜を付す。詞章の左側に墨譜、右側に異説を朱筆で加えている。⑨の畜生まで、つまり大原三千院現行の「声明例時」において、「急」として拍唱(二字一拍)する前の序曲の部分に朱の書き入れが著しい。なお調子に関しては標題の「大懺悔」の下に「平調」と記されており、「声明例時」の現行譜記載内容に一致する。(1)「聖宣本」が笛穴名(昌頭)と絃名、(2)「文保本」が笛穴名、現行譜が宮商角徵羽の略号を用いて音高

となり、祈請の句である。(2)は明らかに天台系の顕宗声明譜で、悔過との結びつきを実証するものはない。しかし「大懺悔」の周辺には懺法法要と悔過法要を結ぶ糸はあるようだ。

(3)「進流本」は、断簡二葉のみであり、「大懺悔」の譜二種はいずれも前欠である。

(3) a、詞章は④の中頃の若我前生の前生から⑬皆悉懺悔まで。次に「小懺悔」の標題を付し、⑭至心発願から⑮成無上道までを記す。無上道の左側に付された譜は欠けている。墨譜は抑揚譜に似るが覚意式五音譜という。⑩及諸悪趣の位置に「已下早頭」、⑪辺地下に「付(付所の意)」とあり、⑭至心発願には「頭」とあり、心の字に「二字延」と加えている。⑮願我等から「付」。⑯の半ば常得値過のあと、十方三世諸仏とあり「自是六字他本無之」との注釈がある。現行譜では慈恩寺修正にこの六字の加わった例がみられる。

(3) b、詞章は⑤の後半の若自作若教から、⑬まで。「小懺悔」の標題をはさんで⑭から⑯まで、末尾に「已上小原様也以行禅律師本交合畢」とある。譜尾の示す音高は a と b では異なる。⑭の至と心の間に縦線と「火」とあるが、a が「二字延」なのに対して「火急」の意であろう。⑮成無上道の箇所も各字間に縦線と「火」が記されており、これは大原の現行譜も同様になっている。

a、b の二様が提示されている理由、進流で唱えた旋律であるのか、大原流を進流の譜に翻譯したもののかなど、(3)の資料からだけでは判断が難しい。

音高の表記から検討すると「一」の譜尾で示される微音の比重は大きいようである。

[3] 「三十二相」

(1) K 「聖宣本」詞章は、本曲にあたる①く②と①く④をひとつづきに記し、急にあたる①く⑧までをひとつづきに記し

ている。裏の注記には「妙音院御様」とある。さらに異説として、①～⑧までのみを譜を付して示しており、やはり裏の注記から「興福寺西金堂様」と知れる。墨譜は全文に付されており、①～⑧の部分には両様ともに箏の絃名による音高の指示がなされている。墨譜は「妙音院様」では原則的に唱句の左側、「西金堂様」は右側に付されているが、文字によっては反対の側も用いている。拍子点は「妙音院様」の①～⑧までと、「急」の八句に付されている。

(1) H〔法隆寺本〕詞章の配列順は(1) Kと同様である。①～②と①～④に続けて①～⑧までが記され、さらに切れ目なく①～⑧が再び記されている。ただし、墨譜は①～④までとつづく①～⑧までのみ付されており、再度記された①～⑧はただ唱句を記しただけのようである。また、①～④までは唱句の右側に統一して譜を記し、①～⑧までを左側に統一して記している。箏絃名による音高表示は(1) Kの内容とほぼ一致するが、いくぶん簡略に示されている。拍子点は、①～④までの全文の左側に打たれている。①～⑧は(1) Kではリズムの変化を示しているが(1) Hでは拍子点が略されている。

(2) 〔文保本〕は雅楽との合奏を前提として実用に供する為に記されたものようである。標題の下に「黄鐘調 第六反加拍子雙腦漸次」とあり、調子の表示をし、②から拍子が変化することを示している。その他に、⑦、⑬、⑲の位置に雅楽の換頭がくることを表示している。また、①～⑧をはっきり「急」と標題していることもこの譜の特徴である。

詞章は、①～②に続けて、①～④、「急」として①～⑧を記している。墨譜はすべて唱句の右側に付されており、すべて笛の穴名による音高表示がなされている。拍子点は朱で、②4までは墨譜の相当する位置に、②5以降は縦に並べて記されている。「急」はまた墨譜の相当する位置に記されている。

(3) 〔進流本〕は断簡なので、⑥ 眼精紺色から⑦ 肩項円満殊妙相までが残されているのみである。唱句の左側に覚意式の

五音譜が付され、「宮」に終止する明瞭な旋律線が示されている。幸いに⑦にはじまり⑫までの一循環が健在なので、基本型が読みとれる。拍子点は墨譜の相当する位置に打たれている。

なお、金沢文庫には三十二相に関する秘説や口決の類が多数残されている。影印翻刻されているのは、付物の笙の譜である。

(4)三十二相 笙譜 至元 ①から⑥までの唱句を記し、その左側に墨譜、右側に笙譜、さらにその右側に拍子点を記している。全体の上部に合奏の注意が細かく付されている。

上 無 (#f)	平 調 (e)	壹 越 (d)	盤 涉 (h)	黄 鐘 (a)	
(㊦)	八	七	六	五	(1) K 聖宣本
(㊦)	八	七	六	五	(1) H 法隆寺本
(㊦)	千	六	中	夕	(2) 文保本
(♩)	↘	一	↗	↑	(3) 進流本
下	乙 ヒ	凡	一	乞	(4) 笙譜

(1) K 聖宣本、(1) H 法隆寺本、(2) 文保本、(3) 進流本、(4) 笙譜の対応関係は前頁図表のように整理されるのではないかと
思う。ただし、絃名の示す音高は黄鐘調の調絃による現行の音高の五度下または四度上と解釈するのが妥当なように思
われる。

三十二相に関しては、悔過会の現行伝承と古譜の記述をただちに結びつけることは困難である。今回対象とした声明
譜は、妙音院様・興福寺様・進流様の実態にせまる手がかりの第一歩と位置づけ、他にも豊富に残された声明譜、付物
譜の検討を加え、天台声明と雅楽の復元演奏をも参考に考察を進めたい。流派と年代の目もりを合わせて、演式の展開
や各曲旋律の変化を追っていくことを今後の課題としたいと思う。

(注1) 「大懺悔」の唱句は天台宗の「声明例時」の用字と句切り方に従って表記した。() は寺による違いを示した。() は東大
寺では唱えない句である。

(注2) 御懺法講事務局発行『声明例時』解説による。他の宗派では④至心発願以下は「小懺悔」として別曲に扱ったり、頭が独
唱している。

(注3) 大藏経四七卷所収 唐知昇撰

(注4) 「三十二相」の唱句は天台宗の現行唱句に従って表記した。寺院による用字や読み方の相違を併記している。

(注5) ポリドールレコード『天台声明』昭和三十九年発行に収録。

(注6) CBSソニーレコード『薬師寺の四季』昭和五十二年発行、解説書所収。

(注7) 若松寺住職、里見教田師筆次第書による。東京国立文化財研究所佐藤道子撮影。

(注8) 毛越寺執事長、藤里慈亮師筆次第書による。撮影同右。

(注9) 昭和六十三年一月六日修正会の録音テープよりおこす。

(注10) 金沢文庫資料全書第八巻 歌謡・声明篇 続 昭和六十一年三月発行。新聞進一、乾克己、福島和夫、高橋秀栄解説。声
明集部の解題は福島、三十二相部は乾の両氏。△図2・図3△は影印資料から作成する。

(注11) 法隆寺所蔵、顕宗声明集。田中稔歴史民俗博物館教授の鑑定による。法隆寺執事長高田良信氏の好意により複写を拝借した。

(注12) 真言声明、五音譜の博士については金田一春彦「真言声明」(『東洋音楽選書』、『仏教音楽』所収)、新井弘順「真言声明に
おける反音曲の記譜法について」(『東洋音楽研究』第四十八号所収)の両説がある。

〔図1〕 悔過会の悔過作法における 大懺悔 の位置

終 結 部	後置部	主 部	展開部	導 入 部	部 位	部 位		
回向文	心経 後行道	大懺悔 小懺悔 破偈	五五五名 五五五名	称名悔過 宝号 五体 (発願)	大呪願	読経 南北問合七 供養文 如来唄 散華	東大寺修二会 初夜	(1) 1・a
回向文	心経 後行道	大懺悔 小懺悔 破偈	五五五名	称名悔過 宝号 五体 (発願)	大呪願	読経 南北問合七 供養文 如来唄 散華	東大寺修二会 後夜	(1) 1・b
		大懺悔 發願 教化	五五五名	称名悔過 宝号 發願 如法念誦	呪願文	供養文 如来唄 散華	東大寺修正会 初夜	(1) 2
	心経 無言行道 發願行道 五大願 宝号(貝・鈴)	大懺悔	祈請諸願 中如法念誦 如法念誦 發願	称名悔過 宝号 發願 請影向 如法念誦	大呪願	供養文 如来唄 散華	法隆寺金堂 修正会 初夜・後夜	(2) 1
	心経 無言行道 發願行道 五大願 宝号(貝・鈴)	大懺悔	祈請諸願 如法念誦	称名悔過 宝号 發願 請影向 如法念誦	大呪願	供養文 如来唄 散華 (梵音 錫杖)	法隆寺夢殿 修正会 西門堂修二会 初夜・(後夜)	(2) 2・3
	心経 後行道 發願行道 五大願 教化 仏名	大懺悔	祈請諸願 唱名号 如法念誦	称名悔過 宝号 發願 唱名号 如法念誦	大呪願	供養文 如来唄 散華 (錫杖)	薬師寺金堂 修二会 初夜・(後夜) (日中)	(3)

(3)	(3)	(2)	(1)	
ㄨ	ㄊ			
一	ㄉ	ㄨ	ㄨ	来
ㄥ	ㄥ	ㄥ	ㄥ	所
ㄥ	ㄥ	ㄥ	ㄥ	作
ㄨ	ㄨ	+	+	衆
ㄥ	ㄥ	ㄥ	ㄥ	罪
ㄨ	ㄨ	ㄥ	ㄥ	不
ㄨ	ㄨ	+	+	自
ㄨ	ㄨ	+	+	覺
ㄥ	ㄥ	ㄥ	ㄥ	知
ㄥ	ㄥ	ㄥ	ㄥ	若
ㄨ	ㄨ	ㄥ	ㄥ	自
ㄨ	ㄨ	ㄥ	ㄥ	作
ㄥ	ㄥ	ㄥ	ㄥ	若
ㄥ	ㄥ	+	+	教
+	+	+	+	他
ㄥ	ㄥ	ㄥ	ㄥ	作

(3)	(3)	(2)	(1)	
ㄨ	ㄊ			
	+	+	+	知
	ㄥ	ㄥ	ㄥ	我
	ㄥ	ㄥ	ㄥ	若
	+	+	+	我
	+	+	+	此
	ㄥ	ㄥ	ㄥ	生
	+	+	+	若
	+	+	+	我
	+	+	+	前
	ㄥ	ㄥ	ㄥ	生
	ㄥ	ㄥ	ㄥ	從
	+	+	+	無
	+	+	+	始
	ㄥ	ㄥ	ㄥ	生
	+	+	+	死
	+	+	+	以

(3)	(3)	(2)	(1)	
ㇿ	ㇿ			
ノ	一		ㇿ	取
ノ	ノ	ㇿ	ㇿ	若
ノ	ノ	ㇿ	ㇿ	教
一	ノ	ㇿ	ㇿ	人
√	ノ	ㇿ	√	取
ノ	ノ	ㇿ	ㇿ	見
ノ	ノ	ㇿ	ㇿ	取
ノ	ノ	ㇿ	ㇿ	随
√	ノ	ㇿ	√	喜
ノ	ノ	ㇿ	ㇿ	惑
ノ	一	ㇿ	ㇿ	作
一	ノ	ㇿ	ㇿ	五
√	ノ	ㇿ	√	逆
√	√	ㇿ	ㇿ	四
√	ノ	ㇿ	√	重
				⋮

(3)	(3)	(2)	(1)	
ㇿ	ㇿ			
ノ	ノ	ㇿ	ㇿ	見
ノ		ㇿ	ㇿ	作
ノ	ノ	ㇿ	ㇿ	随
√	ノ	ㇿ	√	喜
ノ	ノ	ㇿ	ㇿ	若
ノ	一	ㇿ	ㇿ	塔
一	ノ	ㇿ	ㇿ	若
√	ノ	ㇿ	√	僧
ノ	ノ	ㇿ	ㇿ	若
ノ	ノ	ㇿ	ㇿ	十
ノ	ノ	ㇿ	ㇿ	方
一	ノ	ㇿ	ㇿ	僧
√	ノ	ㇿ	√	物
ノ	ノ		ㇿ	若
ノ	ノ	ㇿ	ㇿ	自

(3)	(3)	(2)	(1)	
ㄨ	ㄨ			
ㄨ	✓	ㄨ	ㄨ	於
一	ㄨ	ㄨ	ㄨ	一
一	ㄨ	ㄨ	ㄨ	切
ㄨ	ㄨ	ㄨ	ㄨ	処
✓	✓	ㄨ	ㄨ	常
ㄨ	ㄨ	ㄨ	ㄨ	得
一	ㄨ	ㄨ	ㄨ	值
一	ㄨ	ㄨ	ㄨ	遇
一	ㄨ	ㄨ	ㄨ	十
一	ㄨ	ㄨ	ㄨ	方
一	ㄨ	ㄨ	ㄨ	諸
一	ㄨ	ㄨ	ㄨ	仏
一	ㄨ	ㄨ	ㄨ	普
一	ㄨ	ㄨ	ㄨ	賢
一	ㄨ	ㄨ	ㄨ	文
一	ㄨ	ㄨ	ㄨ	殊

(3)	(3)	(2)	(1)	
ㄨ	ㄨ			
ㄨ	ㄨ	ㄨ	ㄨ	至
ㄨ	ㄨ	ㄨ	ㄨ	心
ㄨ	ㄨ	ㄨ	ㄨ	発
ㄨ	ㄨ	ㄨ	ㄨ	願
ㄨ	ㄨ	ㄨ	ㄨ	々
ㄨ	ㄨ	ㄨ	ㄨ	我
ㄨ	ㄨ	ㄨ	ㄨ	等
ㄨ	ㄨ	ㄨ	ㄨ	從
ㄨ	ㄨ	ㄨ	ㄨ	今
ㄨ	ㄨ	ㄨ	ㄨ	日
ㄨ	ㄨ	ㄨ	ㄨ	乃
ㄨ	ㄨ	ㄨ	ㄨ	至
ㄨ	ㄨ	ㄨ	ㄨ	無
ㄨ	ㄨ	ㄨ	ㄨ	上
ㄨ	ㄨ	ㄨ	ㄨ	菩
ㄨ	ㄨ	ㄨ	ㄨ	提

進流本 文保本 聖宣本 聖宣本 法隆寺本

(3)	(2)	(1) K 妙喜院	(1) K 御橋寺	(1) H
		③		
面	輪	端	正	滿
月	相	④	眉	間
豪	相	右	旋	相

(3)	(2)	(1) K 妙喜院	(1) K 御橋寺	(1) H
鳥	瑟	賦	沙	無
見	相	②	髮	毛
右	轉	紺	青	相

〔圖3〕 三十二相 古譜 詞章の比較

(3)	(2)	(1) K 妙音	(1) K 樂福	(1) H
			四	×
			十	×
			齒	×
			脊	×
			途	×
			雪	×
			相	×
			⑧	
			四	✓
			牙	-
			鮮	✓
			白	✓
			鋒	✓
			利	✓
			相	-

(3)	(2)	(1) K 妙音	(1) K 樂福	(1) H
			眼	×
			睫	✓
			紺	✓
			青	✓
			不	×
			乱	×
			相	✓
			⑥	
			眼	✓
			精	✓
			金	✓
			色	✓
			分	✓
			明	✓
			相	-

(3)	(2)	(1) K 妙音	(1) K 興福	(1) H	(3)	(2)	(1) K 妙音	(1) K 興福	(1) H	
			①	梵	×			舌	⑧	×
			音	×			相	まてのみ記す。	×	
			和	×			広	以下なし	×	
			雅	×			長		×	
			等	フ			覆		×	
			聞	フ			面		×	
			相	×			相		×	
			②					⑩		
			常	×			常	フ		
			光	×			得	フ		
			面	×			上	フ		
			各	×			味	フ		
			一	フ			適	フ		
			尋	フ			悦	フ		
			相	-			相	-		

《譜1》東大寺修二会初夜 大懺悔(短音)

(句頭)

[同音]

至心ニ懺ア--ン 悔--ニ 工 如オ-- 是工 等一切世界諸オ

仏ウ世尊常住在世是諸世尊 等オ 惡イ 念我 憶念我 証知我若我此主

若我前王 従ウ無ウ始生死以來 所作衆罪 不ウ 自覚知 若自作

若教他作見作 隨兵 若塔若僧 若十方僧 物若自取 若殺人取見取諸善

《譜2》東大寺修二会初夜 小懺悔の冒頭

至心ニ--ン--ン--ン 尻ッ 願ニ--ン-- 願 哉 等

《譜3》東大寺修二会別火坊 大懺悔(長音)

(句頭)

[同音]

至心ニ懺ア--ン 悔--ニ 工 如オ-- 是工 等一切世界アア

等オ 惡イ-- 念我-- 憶 念我証-- 知我-- ア 若我-- ア

諸オ 仏ウ-- 世尊オ ン 常住ウ 在世是諸--オ 世尊-- ン

此生オ 若我-- 前生 従ウ無ウ-- 始主-- 死 以來イ 所作-- ア

衆罪-- ア 不 自イ-- 覚知-- 若自作-- ア 若教のウ 他作ア--

(構成音)

見ニ作ア-- 随イ善イ 以下同様

《譜4》法隆寺大懺悔

(句頭) (大衆)

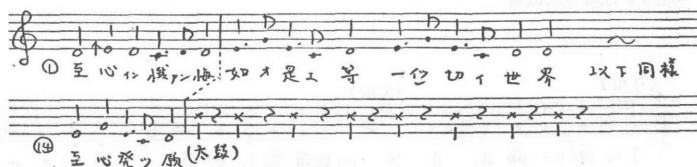
至心滅^ア悔是是等一切世界諸仏世尊常住在世
 是諸世尊當慈念^シ我愧^シ念我証諸知我若^ク我此至才
 若^ク我前生從無始生死以來取作罪^イ不自覺^シ知
 若^ク自作若教他作見作隨^イ善若^ク塔若^ク僧
 若^ク十方僧物^ツ若^ク自取若教人取見取隨^イ善
 式^ノ作五逆^シ四重無間重罪若自作若教他作見作隨^イ善
 十不善^ノ道自作^ラ教他見作隨善所作罪^イ障
 式^ノ有衆^ク威^シ式^ノ無覆^ク威^シ忘墮地獄^ク微塵^ノ生^ク及諸惡^ク取

《譜5》薬師寺大懺悔

(句頭) (大衆)

至心懺^ア悔工如才是等一切世界^ノ諸^ノ仏世
 尊^ノ常住在世是諸世尊^ノ當慈念^シ我

《譜6》若松寺大懺悔



① 至心ハ懺ン悔ニ如ク足ス等 一何ヨイ世界 以下同様

② 至心アツク懺 (木鼓)

《譜7》若松寺三十二相の旋律類型



① 烏ウ - - - 夏ツ 鷲イ - - 沙ア - - - -

右 - 肩エス相 ② 鬚ツ 毛 - - - - ウ - - -

ウ - 右ウ - 軋 - シ 紺 オン 青オ - 相オ -

③ ⑧ ⑭ ⑳ ㉔ ㉒ ㉑

④ ⑤ ⑥ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉜ ㉝ ㉞

⑦ ⑬ ⑲ ㉑ ㉓

《譜8》毛越寺三十二相の旋律型

句頭

① 烏 琴 ツ 賦 沙 無 見 エ ン 相 ② 髪 ッ モ オ ー 右 軀 ン 紺 青 オ ー 相

同音 (全句)

《譜9》中尊寺三十二相の旋律類型

① 烏ウ 琴ツ 賦沙アー 無ウ 見ン 相 ② 髪ッ 毛 右 軀 ン 紺 青 オ 相

③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫

⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳

㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛